倒産回路

麗羅

集英社

倒産回路

麗　羅

集英社

倒産回路

一九七八年四月一〇日　初版印刷
一九七八年四月二五日　初版発行

定価　七八〇円

著者　麗羅

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二二三〇―六三六一
販売部（〇三）二二三〇―六一七一

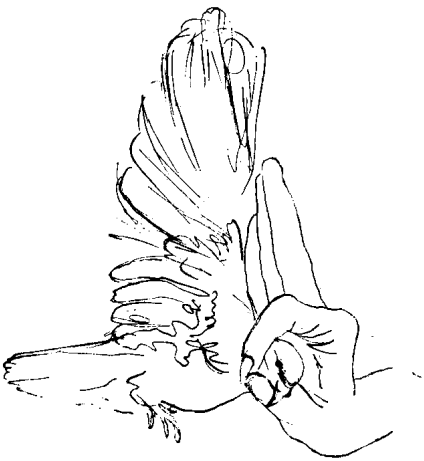
印刷所　図書印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1978 REI LA　Printed in Japan

0093―775008―3041

目次



第一章 陥穽 7
第二章 拒絶 42
第三章 憤怒 75
第四章 虚勢 106
第五章 崩落 140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　爆破（ばくは）　178
第七章　悔恨（かいこん）　208
第八章　閃光（せんこう）　247

装丁　三嶋典東

倒産回路

第一章　陥穽

1

三月下旬のある朝。

比良雄吾は小さな風呂敷包みを左手に持って、千葉刑務所の正面通用門を出た。懲役三年の刑期をあと一年残しての仮出獄だった。

冬がまだ停滞しているような寒い陽気である。鉛の板のような雲が空一面に敷きつめられて、強くはないが刺すように冷たい西北風が吹き下ろしていた。

比良は夏物の灰色の背広を着たきりで、コートを着けていなかった。千葉刑務所に収監されたとき、私物預けにしておいたものである。寒空の下を、よれよれの夏服を着たその姿は、背後の厳しい鉄格子の門構えとつりあって、いかにも刑余者といったようすが滲み出ていた。

だが比良自身は淡々とした表情でいた。彼の顔には、服役生活から受けた憔悴の色も見られなかったし、やっと釈放された喜びも見えなかった。

後の方で鉄の門扉が閉じる鈍い響きを耳にして、比良はごく自然に足を竦ませた。

外はほぼ方形のちょっとした広場になっていた。背後は刑務所の正門と通用門で、左には高いコン

クリート塀が連なっている。右手には面会人待合所や売店の細長く低い建物がたっていた。
広場の正面には、材木を梯形に組んで黒と黄色の塗料をまだらに塗ったバリケードが、自動車一台分の通路を開けて横に並んでいた。
広場は静まりかえっていた。待合所や売店のガラス戸も閉まっていて、人影はまったく見えない。建物の手前の角に桜らしい老樹が一株立っているが、裸の枝を曇り空にさしのべてさむざむとふるえていた。
比良は心もち肩をすくめ、下唇を軽く噛んだ。
(やっと出所できたというのに、暖かく出迎えてくれる肉親が一人もいない)
顔には出さないが、一抹の寂寥感が寒風のように比良の胸を走った。が、すぐに、これでいい、そう自分に言い聞かせると、ゆっくり足を踏み出した。
誰の眼にもつかずにひっそりと出所して、ひっそりと自宅に戻りたい——これが比良の考えだった。それで、仮出獄の身元引受人である弁護士・牧原秀喜が、出迎えを申し出たのを辞退したのだ。
ただ、誰一人出迎えてくれぬ出所がこんなに侘びしいとは、考えもつかなかった。まるで外部の社会が自分を拒絶しているようである。
(五十年近くも人生を生きて、おれはいったい何を得たのか)
慙愧に似た思いが、うねりのように重く静かに押し上がってくる。
比良は胸を張りゆっくりと歩いた。自分の心に迷いや怯みが生じたとき、毅然と振舞うのが比良の信条である。
比良は世間のすべてを自分の敵だと考えて生きてきた。如何なる場合でも隙や弱みを晒したくなかった。ちょっとでも弱みを見せたら、敵は同情するどころか、その弱点からこちらを攻撃して抹殺し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ようとするのだ。だから、親兄弟や妻子のいない身軽さまでも、より強力な武器にしてきたのだった。
比良はその考えを〝狼の思想〟だと解釈している。狼は死の間際まで、雄々しく且つ猛々しく生きねばならぬ。力のあるうちは荒野を駈けめぐり、力の限り闘って獲物をあさる。傷つき力が衰えたら、誰も知らぬ深い谷間にひそんで、一人静かに死を待つのだ。
千葉刑務所を出所した今朝の比良の心境は、まさに傷つき力が衰えた狼のそれだった。たとえ無人の広場においても、惨めな自分を長く晒したくない。一人きりで籠っていられる窖に早く帰って行きたい。死期を悟った野獣が秘密の墓場を求める、本能のような意志が、その体の中に甦っていた。
しかし、比良は決して足を早めない。狼は、寒いときほど背を伸ばし、飢えたときほど胸を張り、急ぐときほどゆっくりと歩く。惨めな気分のときにはいっそう虚勢を張る。疾風のように早く駈けるのは獲物を追うときだけでよかった。
広場の地表はアスファルトで舗装してある。その固い足応えを意識しながら、比良は心の中に誓ったことを思い出す。
(おれはもう二度と、獲物を追う貪欲な狼には戻るまい)

2

「出物の安い機械があるんですよ。新品だと七百万はするんですが、先方に事情があって三百万で譲るというんです。社長さん、もう三百万円だけ追加融資して下さい」
おどおどと、それだけに誠実さが見える態度で寺野信次が言ったとき、
(このひとが倒産するのも、そう遠くはないな)

と、比良は判断した。
寺野は、大田区の西糀谷で機械工場を営んでいる。従業員が十人たらずで、二十坪ばかりの階下を作業場にし、その上を住居にしている小さな町工場主である。
彼に、比良は半年前から二百万円貸していた。月の金利は八分だが、寺野は支払を一度も滞らせていなかった。
調査表によると、寺野の工場は月商八百万円、荒利益が四十パーセントで三百二十万円、人件費その他の経費が二百五十万円程度で、毎月七十万円の純益が残る計算になっている。土地は借地だが建物は自身のもので、これにはK信用金庫の二千万円の根抵当がついてた。しかし寺野の申告では、借入残高は一千万円しかない、とのことである。
寺野は四十過ぎの小心そうな男で、比良のような高利貸しにとっては、質の良い客であり、普通ならあと三百万円追加融資しても大丈夫なケースだ。
だが比良は、彼からある翳りを感じとった。寺野がおどおどした態度で追加融資を申込むのを見ているうちに、十三年も高利貸しをしてきた比良の獣のような勘が、そう働いたのだ。
「私のところでは営業の原則として、お得意さんに貸した金を回収しないうちは、絶対に追加貸付けをしないことにしていますので……」
婉曲に断ると、寺野は意外にあっさりと諦めて帰っていった。
その寺野の後姿を見ながら、
(倒産する前に、早く債権確保の手を打っておくべきだ)
と比良は考えはじめていた。
寺野に貸してある二百万円は、何の担保も取らない信用貸付けなのだ。無論、寺野自身の約束手形

は入っているが、倒産して銀行取引が停止されたらそんなものは何にもならない。
寺野は、銀行筋以外からの借金は比良さんのところだけです、と言っているが、それも信用できなかった。
意外に多くの高利貸しからの負債があって、最悪の状態に追い込まれているかも知れないのだ。
寺野のような零細企業が倒産して、高利の債権者が大勢いたら、もう絶対に貸金は戻らない。だが倒産する前なら、いろいろと打つ手段がある。うまくすれば、自分の債権を保全しながら、債務者を救済することもできる。
（明日の朝早く、おれが行ってみよう）
比良は四億円程度の資金を動かし、二つの事務所を構えて、社員を十五人も使っている。二百万円程度の小口なら、社長の自分が乗り出すほどのことはないが、ただ単純な取立てと違って高等戦術を策するとなると、部下の中にはそんな力量のある者がいなかった。
寺野信次は、狼を自負する比良にとって兎のような一匹の恰好な獲物に過ぎない。ただ、比良の眼には、寺野があまりにも弱々しく見えた。四十過ぎた年輩なのに、まったく世間ずれしていず、正直と誠実さだけで、おどおどと世渡りしているようだ。
こんな弱い兎を喰い殺すことは、狼の本懐ではない。肥え太った野牛や猪に対してなら攻撃心も湧くが、相手が弱小であれば気持が鈍る。
寺野の資産は全部で一千万円か千五百万円程度だろう。丸呑みしたところでたかが知れている。比良はそれほど飢えてはいなかった。
比良は、寺野が巨額の高利の負債を背負って、二進も三進もゆかないような状態におちいっているなら、彼を救済してやってもよいと考えた。自分の債権を確保しながら債務者も救う——それができ

る自信を比良は持っていた。

翌朝。若い社員に車を運転させて、寺野の工場に着いたのは六時前だった。運転手の他にもう一人の社員を連れていた。

工場はまだ閉まっていた。古びたガラス戸の内側に黒く汚れたカーテンが掛かっていて、いくら呼んでも、誰も起きてこなかった。社員を公衆電話に走らせて電話を入れさせたが、しばらくして首を振りながら戻ってきた。呼び出し音が鳴っているのに、誰も受けないという。

(昨夜のうちに夜逃げしたのか?)

そのことが直観的に浮かんだ。債務者に夜逃げされた例は数えきれないくらいあった。

二人の部下にガラス戸を持ち上げさせると、造作もなく外れた。合わせ目の錠を外してもと通りに嵌めてから、中に入った。

階下は全部コンクリートの叩きで、旋盤やボール盤などの機械が据え付けてあり、材料の鉄材や切屑などが散乱している。機械油の臭いが鼻をついた。

比良は階段の下から上に向って二度ばかり呼んでみてから、上がって行った。社員の一人が続き、もう一人は階下に残った。

二階に上がると廊下が走っていて、左側が炊事場、右側が部屋らしく襖仕切りになっていた。

廊下を四、五歩ばかり進んで、比良は、

「寺野さん、誰かいませんか」

閉まっている襖越しに、もう一度声を掛けてみた。

依然として反応がない。その空間全体がも抜けの殻のように空疎な感じで、やけに静まりかえって

いる。
（やはり逃げられてしまったか。これなら、昨日社に来た寺野を捕まえておくべきだった）
裏切られたような口惜しさがこみ上げてきて、荒々しく襖を開けた。
その瞬間、比良は電撃に打たれたようにその場に立ちつくしてしまった。周囲の大気が瞬時に固まりついてしまったように、呼吸することもできなかった。
そこは八畳と六畳との二間続きの和室だが、その境の鴨居に人間が三人ぶら下がっていた。茶色のズボンに鼠色のジャンパーを着た寺野信次を中央にして、黒いスラックスに白いブラウス、その上に紫色のカーディガンを羽織った三十五、六歳の彼の妻君と、黒茶色の和服を着た、彼の母親かと思われる白髪の老婆が並んでいた。三人とも赤い糸のような鼻血を垂らしていた。
三人の足もとの八畳の部屋には布団が敷かれ、子供が三人、細紐で首を括られて横たわっていた。
三人の大人は、物干用のビニール製ロープで首を吊っていた。大人たちは足下の子供たちから顔をそむけるように、うつろな視線を虚空に投げていた。
「社長、どうしたんですか」
後から上がってきた社員が声を掛けたが、比良は返事もできない。
寄って来てその光景を見た社員は、言葉にならない絶叫をあげて、その場にへたへたと坐りこんでしまった。
そこにはあまり血も流れていないし、まだ死臭も立ってはいない。それだけに比良はいっそう生々しい凄絶さを感じた。身も心も金縛りにあったようで、自分がどうすべきかを考えることもできなかった。社員もわなわなふるえている。
しばらくして、比良は、やっと呻き声を発した。

「何で……、ひどい、こんな」

彼らがどうしてこんな酷い死に方をしたのかをさしたものなのか、また比良自身がどうしてこんな酷い情景を発見しなければならないかを嘆いた言葉か、自分でも判らない。

彼は今までにも幾度も死体に接してきたし、数多くの修羅場をくぐり抜けてきて、たいていのことには動じない強さを持っているつもりだった。

だがこんな衝撃ははじめてである。

後日判明したことだが、寺野信次は三千万円もの高利の債務を負っていて、毎月の支払金利が四百万円にもなっていたという。寺野には一か月に百万円以上支払う能力はなかった。不足分を新規に借金せねばならず、翌月からはその方の金利を支払うために、また別の借金をするという、蟻地獄の中に嵌まりこんでいたのである。

十三年の金貸し生活で、比良は、債務者に夜逃げされたり、暴力団を雇った相手に逆に開き直られたり、さまざまな目にぶつかってきた。二百万円どころではなく、もっと巨額の金を喰い逃げされたことも何度もある。

だが、債務者の一家が心中し、しかも比良自身がその第一発見者になったのは、これがはじめてであった。

(何も借金なんかで、一家心中することもあるまいに……)

その地獄絵のような凄惨な光景は、比良の心に強く焼きつけられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com